
生徒会の切札

1-1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒会の切札

【NZコード】

N7443Z

【作者名】

1 - 1

【あらすじ】

碧陽学園生徒会…そこには、4人の美少女と1人の美男子（？）がいる。

その中に追加メンバーとして足を踏み入れた2人目の男は文武両道の天才（天災？）でゲーム名人！？

そんなオリ主・豹堂真の織り成すドタバタ劇！

これが処女作なため、誤字・脱字があるかと思いますが、どうかよろしくお願ひいたします。

存在しないプロローグ（前書き）

とある作者様に感化されて書いてみました。
今回はプロローグのみです。

これからよろしくお願いいいたします。

それでは「生徒会の切札」始めていきたいと思します。

存在しないプロローグ

- ルール1 神の存在を受け入れろ
- ルール2 彼らに直接触れてはいけない
- ルール3 友達の友達は我ら。それが干渉限界。
- ルール4 企業の意向は何よりも優先される
- ルール5 スタッフは、個人の思想を持ち込むなかられ
- ルール6 情報の漏洩は最大にして最悪の禁忌である
- ルール7 我らが騙すのはヒトではなく神であることを忘れてはならない
- ルール8 このプロジェクトに道徳心は必要ない。全ては企業の利益のために
- ルール9 性質上、学園の保守は最大の命題である

追加ルール 今年の生徒会には気をつけろ

存在しないプロローグ（後書き）

うーん…プロローグだけでよかつたのだらうか…

? 「まあいいんじゃね？原作もこんな感じで始まるわけだし。」

「そうだよな…ってあんた誰！？」

? 「あ？俺は…てちょっととまで…何で名前伏字なんだよ…ありすじで名前てるから出したつていいだろ…？」

えー まだ本編入つてないしー

? 「こいつ…」

まあ次回には名前てるかな？次回設定か本編をやるし

? 「まあ、それならいいか…」

てなわけでまた次回お会いしましょう それではー

駄弁る生徒会？（前書き）

遅くなりました
このような小説に3件ものお気に入り登録があつたこと感謝いたします

それでは生徒会の切札「駄弁る生徒会」始めていきたいと思います

駄弁る生徒会？

「世の中がつまらないんじゃないの。貴方がつまらない人間になつたのよつー！」

まどろみの中にあつた俺の意識が、会長のざこかの本の受け売りの様な言葉によつてもどつてくる。
折角気持ちよく寝ていたのに…。でも会長にしてはいい事をいつたと働かない頭を使いながら思う。
初めて経験したこと、何度もやつていううちに馴れて新鮮な気持ちを感じなくなるからな。

初めての一本背負い。

初めての面打ち。

初めての瓦割り10枚。

初めての…つて、ここまで武術関連ばかりじゃないか？

あ 自己紹介が遅れたな。

俺の名前は豹堂真ひょうじょうまこと。この碧陽学園生徒会の会長補佐の役職についている。

ちなみにこの物語の語り部で、主人公でもある…急に俺は何を言い始めたんだ？主人公とかつてなんだ？…まあいいか。

さて、そろそろ鍵がへんな事を言つて、会長を慌てさせむじろかな？

「じゃ、童貞も悪くないつてことですか？」

「「ふつー」」…俺の予想をはるかに超えたこと言いやがつた…。

おそらくつりのお子様会長は涙田で杉崎を睨んでいるだらう。何で分かるのかつて？経験則だよ つん

「今私の言葉から、どうしてそんな返しが来るわけ？」

「甘いですね会長。俺の思考回路は基本、まずはそっち方向に直結します！」

「なにを誇りしげに！ 杉崎はもつむよつと副会長としての自覚をねえ……」

「ありますよ、自覚。この生徒会は俺のハーレムだという自覚なり十分！」

「じめん。副会長の自覚はいいから、そいつの自覚を捨てるところから始めよしつね」

相変わらずだなあこの一人はと思いながら一人を眺める…おっとこの一人の紹介もしないとな。

一人はこの生徒会の会長・桜野くりむだ。
さくらの

どこからどう見ても小学生としか思えない容姿・頭脳のスーパーお子様。

よく高校3年まで進学できたものだ ほんとに

もう一人はこの生徒会の数少ない男子の片割れの杉崎鍵。
すぎさきけん

見た目はかつこいいのに、常日頃からハーレム ハーレム言つてい
るせいかそこまでもてない一枚目半な男。

まあそれは理由があるからなんだがな ちなみに俺の親友でもある

「あれ？ 真起きてたのか？ てっきり当分起きることないと思つたん
だけど」

「おっす おはよう 相変わらずだなお前は… 会長を口説くんなら
後にしてくれ あとに」

「く 口説くんじゃないわよーもつたく…」

そういうながら会長はさきほど吹きだしたお茶を、ティッシュで吹

いてそのティッシュを丸めて『ミミ箱に投げようとする
てか片目を閉じてまじに狙つてるよこの人…ほんとに子供だなあ…
そう思いながら俺は鞄からP Pを取り出す
今日は何しようかなあ…モン…でもいにしへファンタジー ターで
もいいし…

「かいちょー」

「なによお」

「好きです。付き合つてください」

「にやわ！」

そんな会長に対し鍵が唐突に告白してティッシュが俺の目の前に
飛んでくる まあどうでもいいや
よし 今日はパワ 口でオールポジション作るまで粘るか とりあえず最初はキャッチから…

「なんで杉崎はそんな軽薄に告白できるのよー」

「本気だからです！」

「嘘だ！」

「『ひらし』ネタは古いですよ会長…」

「大体杉崎にどこに本氣があるのよ…生徒会に初めて顔出した時のせりふ 覚えてる？」

「えつと…なんでしたっけ？『俺にかまわず先に行け！』でしたつけ？」

「ちなみに俺は『ナズエミデルンディス（0W0#）』でしたね
確か

「ショッパンからどんな状況よー…それと豹堂…仮面 イダーは電
しか見てないわ！」

まじかよ ブ イドもいい作品だと思うんだけどなあ…ネタ抜きで
てか会長も仮面 イダー見てたんだな

「あれ？違いますか？じゃあ…『ただの人間には興味ありません

宇宙人 未来人』」

「危険よ杉崎！いろんな意味で」

「大丈夫です。原作派ですから」

「何の保障！？あとアニメの出来は神だよ！？」

「…一期はどうして作画がけいん！つぽかったのか…」

「やめなさい！ そこには触れちゃいけないわ！」

ゲームの画面に集中しつつ鍵に便乗して会長を弄る
お！天才きたこれいとこまでいけるんじゃね？！

「皆好きです。超好きです。皆付き合つて。絶対に幸せにしてみせ
るから。」

鍵がこの生徒会に顔を出した時のせりふを言つ まあ俺そん時いなかつたけどね

「そうよそれ！まつたく…誰でもいいから付き合つてなんて誠実じ
やないわ！」

よく言つよ…鍵がそんなせりふを言つたのも こうじう考え方をする
よつになつたのも会長のせい といつより会長のおかげなのに

「一途なんです！美少女に！」

「括りが大きいわ！」

「希少種ですよー美少女。それによくないですか？最初から「俺は
！ハーレムエンドを目指す！」って宣言するの」

「あんたはそちらのギャルゲ主人公とは基本スペックが違いすぎる
わ」

「確かに…鍵は主人公の友人のギャグ要員つて方が似合つてるかも
な。まあ俺もだらうけど」

「おい真！お前はなんでちょくちょくしか喋らないの！？そして俺

の親友だよな？！なんでそんな俺に厳しいんだよ！」

「厳しい？俺はただ単に事実を述べただけだけど？」

「そ・そつよ！豹堂の言つとおりよー！」

鍵が「顔はいいのにー！」とか言つているが無視無視

若干涙目になりながら鍵は俺の前にあつた会長の捨てそこなつたテ

イッショを「ミ箱に投げ入れる

「…杉崎つてや タリげないとこりで優しいわよね…無意識に」

「え？…」「うギヤッブつて好感度上がるでしょ？」

「狙い！？しまつた！あたしの中の杉崎への好感度は若干上昇してしまつたわ！？」

「この一人はほんとに仲いいなあ こんなに騒いで…つて！」

「つああああああああああああ 炎上したああああああああああああああ

あ

「「急にどうした！？」」

「…畜生…またこいつ炎上しやがつたよ…やべ まじで涙出きていた…

そんなこと思いながらゲームを終了して別のゲームに入れ替えていると生徒会室の扉が開いた

「キー君 アカちゃんをいじめないの そしてニュー君…大丈夫？廊下中に声が響いてたけど…」

この人は紅葉知弦さん 僕の先輩でおこさま会長とは違い出るところは出でる綺麗な先輩だ

クールビューティーという言葉があう人だ ほんとの一人が親友

つて信じられないな…

ちなみに二コー君つて言つのは俺のあだ名だ

真しん新new二コー

つてな感じのあだ名 まあ個人的にも気に入つて

「やだなあ知弦さん 弄つてるんじゃなくて辱めてるんです」

「心配しないでください知弦先輩…これから別の世界に行くんで」

「余計に悪質よ? それ あと二コー君現実逃避はいいから なんか
厨二臭いわ」

「グフッ…じ 実際逃げてる上に俺の趣味的にあつてるから反論が
出来ない…

「大丈夫です同意の下ですから てか今日集まり悪いですね俺のハ
ーレム」

「ハーレムじゃなくて生徒会ね それにキー君のそういうところ直
せないのかしら?」

「ぐ…で でもこれが俺ですから…これが俺のすべてですから」

「つまりお前はその程度の男つてことだな」

あ また鍵が涙目になつた 相変わらずこいつ弄りやすいな (S
つけ全開)

「まあ 私はキー君のそういうところ 嫌いじゃないけど…少しは
改善するべきじゃないのかしら?」

「くで でもこついう人こそ落ちたら激しいにちがいな」

「あ それは正解 私小学校のころに好きな人に1日300通送つ
たりして最終的に精神崩壊まで追い込んだりしたし…あなたはどう
かしら」

ガクガクブルブル そのことを聞いた俺たち二人全員青ざめた顔で
知弦先輩を見る…

そんな中鍵が口を開いた

「分かりました…」

「あら それを聞いても私を受け入れてくれるの？ いま私の中の好感度がぐんと「知弦さんは 体だけの関係を指します！」…」

「ア…鍵のアホ…そういうのがあるから三枚目って言われるんだよ」

「お前は今日絶好調ですね！」

あれ？俺声に出してないよね？ あれ？

「声におもいつきし出しましたからね！？なにその「え！？」って

顔！」

今日の鍵は精神的にズタボロだな 主におれのせいで
そんな鍵とのやり取りをしているつむぎ会長がどこからかお菓子を
出して食べようとしていた

「「太りますよ」」 おつと鍵と被つた まあ誰しもが思う事だも
んな
「ふ 太らないよ 私太りにくい体質だし」

そう言いながら会長はお菓子を口の中に放り込む
その刹那 知弦先輩と俺はアイコンタクトを交わす

「えつとこの問題は…『メタボリックシンдро́м』ね よし正解
つと」

「近年多いですよね メタボな人って この年でメタボって人もち
ょくちょくいますからね」

「…」

この会話を聞いた会長が涙目な状態で椅子から崩れ落ちる…その間

に知弦さんとほくそ笑む

そのとき鍵がこっちを見て青ざめてたように見えるけど 気のせい
だろう

そして鍵が会長に近づいていく

「会長 心配しないでくださいもし太つたら…」

「えす 杉崎 太つて醜くなつた私も好きでいてくれるの？」

「その時は…仕事に生きればいい」「リアルアドバイス?！」

「俺 陰ながら応援しますから！ ブログに匿名で励ましのメール
送りますから」

「陰からなんだ！ 匿名なんだ！ 太つたら見捨てるんだ！」

「だから太つちゃ駄目ですよ 太つちゃ」

鍵が笑いかけながら会長にそういうが お前からつと酷いこと言つ
たよな

まあ それが杉崎鍵つて人間なのだろうけどさ

そういうしていいるうちにまた生徒会室の扉が開いて残り一人のメン
バーが入ってきた

駄弁る生徒会？（後書き）

どうだ！？

真「長いし読みづらい 出直せ」

グサツ（胸にルガーランスが刺さる）

真「てか 今回で深夏と真冬はでてこないのな

まあ 自分の執筆が遅いせいで話の進行も遅く…

真「お前のせいだな つまりは んで？ 次回の投稿予定は？」

うーん…年末だから実家にも行かないといけないし それに大掃除
も…

真「まあ こんな駄作者だが気長に待っていてください」

ほんとに申し訳ない それでは次回の駄弁る生徒会？でお会いしま
しょう

それではー

主人公設定（前書き）

次話の前に主人公の設定をやっておこうかと思います
すこしネタバレ的な要素が入ってあります
それでも良いという方はこれから先を読んでください

主人公設定

名前	豹堂 真
年齢	16歳
所属	碧陽学園2年B組 壁陽学園生徒会 生徒会長補佐
身長	167cm（ただし外見や武術における威圧感によってそれ 以上に見える）
体重	58kg（決して貧弱というわけではなく内に引き締められ ている）
趣味	PCいじり・ゲーム・読書・体を動かすこと
外見	クオーターであり金髪で目の色が蒼という日本人離れした容姿 目が少し釣りあがつていて怖い印象を受ける 肩まである後ろ髪を一つに束ねている

性格

前述の外見のせいで初対面の相手には大半の場合避けられる
しかしその性格は友好的で友人や彼を慕う後輩も多い
他人に向かられる好意に対しては敏感

だが本人がそのような体験をしたことがないため自分に対する好意には疎い

中学のころはとある事情でかなり荒れていた（しかしその荒れていたおかげで鍵と知り合った）

そのため中学時代の一部の生徒にはかなり避けられている

備考

もともとこちらの地方の出身ではなく前述の事情で中学入学前のころにこちらに越して来た

現在祖父との一人暮らしで、祖父の経営する道場の師範代補佐として過ごしている

ゲームが大好きで、杉崎と深夏曰く「真冬並みのゲーム廃人」運動神経もよく、深夏と同じく部活の助つ人によく呼ばれる

近辺の不良がすぐ頭を下げるほど喧嘩も強いらしい

杉崎は中学からの知り合い、会長・知弦・深夏は高校1年からの知り合い

真冬とはネット上では過去に何度もあつっていたが、現実では真冬が入学前に一度あつた程度

主人公設定（後書き）

今回は本家の主人公 杉崎鍵の登場です

鍵「何で今回は俺？」

いや 真には見せないほうがいいかな と個人的に思つてて

鍵「へー とりあえず聞きたいんだけど…」

はいはい なんでしょう？

鍵「真のプロフィールの”旧姓”つていつたいなんなんだ？」

あー…そこは後々明らかになる予定だからいまはスルーで

鍵「なんだそれ？」

まあ 真にも悲しい過去があるってことだよ

鍵「まあ 本人から聞いたほうが手っ取り早いもんな」

そだね てことで今回は設定のみでいいませんでした

次話もなるべく早く書き上げますので 今後ともよろしくお願ひします

それではー

駄弁る生徒会? (前書き)

今回は駄文の上に詰め込みすぎたためにひみつです
そして今回真冬のフラグを若干立てよつかと思ひます

今年最後の投稿です

それでは駄弁る生徒会? 始めて行きたいと思ひます

あ あとお氣に入りが10件行つてました
本当にありがとうございます

駄弁る生徒会？

「うーーーっす」「おそくなりましたー」

対照的な掛け声で二人の美少女が生徒会室に入つてくれる

うーーーっす と氣の抜けたような挨拶をしながら入つてきたのは椎_し
名深夏_{いなみなつ}

俺や鍵と同じ2年B組の所属で 生徒会副会長の役職についている
スポーツが得意… というより好きでよく（俺も一緒にだが）部活の
助つ人に行つてしたりする

碧陽に入学してから時々スポーツなんかで俺と勝負とかもしてる…
勝率？五分五分だよ

深夏に隠れるように入つてきたのはこの生徒会メンバー唯一の1年
生 椎名_{しいな}真冬_{まふゆ}だ

深夏とは対照的に白い肌と色素の抜けたような髪のおとなしい印象
をもつ女の子だ

深夏の影響なのか分からないが男が苦手らしい 大丈夫かな俺：
ちなみにこの子とは昨日初めてあつたためにいまいちどんな子な
か把握していない

でも鍵と深夏曰く「お前と同類」だそつだ… 同類つてビジういう意味
だろう？

「お？ 真冬ちゃん 鞄のストラップ変えた？」

「え あ はい でもよく分かりましたね」

「大丈夫！ 真冬ちゃんのことは何でも把握しているつもりだから

！」

「あ ありがと「うーーーっす」

おい鍵 真冬ちゃんひいてるわ そんな」としてると後ろから
ガチッ！ 深夏が鍵にヘッドラックをかける あーあ…俺知一らね
つと

「おい鍵！ あたしの田の前で真冬を口説くんじゃねーよ…」

「つ…ギブギブ…ちよ 見捨てないで 真！ 助けて！ いやま
じで…」

はあ…まったくしようがねーな…

「深夏 そちらへんにしどけ…流石にそれはまずいぞ
「ちえー」と言いながら深夏はヘッドラックをとこいこく
「ま 真 ありがとう たすか「そういうのは俺がやつてやるつと
おいー裏切ったなまー」…」

そう言いながら今度は俺が鍵にヘッドラックをかける
鍵が俺の手を叩いてギブつて言つてているがこの際無視

「でもお前さつき深夏が技をといた瞬間に若干残念そつたよ
な…まさか」

「え…？ 『 誤解だつて！ つておい深夏… 右手を振りかぶ 』
グング ル！』『ハツ！』

グチャ！

鍵の顔辺りから聞こえてはいけない音が聞こえた気がする
力を緩めると鍵が力なく崩れる…

その上深夏の右手が赤く染まってなんかないぞ…み 見えないって
言つてるだろ！

そう思いながら俺は自分の定位置である場所に座る ちなみに俺の
座っている位置は

鍵

知

深

真

俺

ところの感じだ。俺は深夏と真冬ちゃんの間に座つてこりの感じになる

真ん中の円は何かつて？念長の大好きなお菓子「じつと チョコ」だ ちなみに俺も大好きだ

「あの……」

「ん？ じつしたの真冬ちゃん？」

俺の右隣に座つてこりの真冬ちゃんがオズオズと俺に対して話しかけてくる

よかつた…昨日の顔合わせの時の第一印象最悪だったからなあ…

「あの…豹堂先輩が「真」え？」

「真でいいよ 呼び方 そんな硬つ苦しい呼び方は苦手だから」

「で でも…」

「うーん ジヤあ『真先輩』でじつへ。その方が呼びやすいかな

？」

「ジヤ ジヤあ今度からはその呼び方で…」

よかつた…いまこりの真冬ちゃんとは「//コ-「ケーショ-ン」とれるか不安だったんだよな…

これで一步前進 まずは仲良くなれるところから始めないとね

「…流石だな真 男が苦手な真冬がまだ2回しか会つてない男のこ
と名前で呼ぶなんて…」

「ん? セウか? まあ俺きつかけで男に対する苦手意識を拭し
てくれればいいんだけど」

「いやそういう意味じや…まあいいか」

「そ それで真先輩 セウきの続きなんですけど…」

「あ そうだったね それで何を言おうとしたの?」

「はい…真先輩のそれ…」

と言つながら俺のP Pを指差してくれる…

「これ? いやあ これからモン ンでもせわづかと「セウぱいつー、
「セウー」

真冬ちゃんがものす」こ興奮して顔を近づけ…って…?

近い近い近い!!!!!!真冬ちゃんの顔が俺の前にいいいいいい
!!!! (真は異性に対する免疫は高くないです) (作者)

「真冬ちゃんがものす」

「そ そつなんだ…」 やばこ 多分俺の顔真つ赤だ

「はい! でも周りでモン ン…とこつより趣味の合ひつ友達がいな
くて…」

だから… と言つながらさうに顔を近づけてくる やばいやばいや
ばい!! 触れる触れる触れる…!!

と思つた瞬間に急に真冬ちゃんが離れる 助かつた…でも何で?
よく見ると知弦先輩が真冬ちゃんの肩を掴んで椅子に座らせていた

「ひひ真冬ちゃん ハロー君が困つてゐるでしょ (ま まつたわ
まさか真冬ちゃんがこんな大胆な行動に出るなんて…)
「で でも真冬! 真先輩とゲームの話を「するため」に顔をあんな

「近づかぬの？…！」

真冬ちゃんが真っ赤な顔をして、ひたちを見てくる
思わず顔を背けたけど、多分いま俺の顔も真っ赤だと思いつ
ホン、と可愛いらしく顔で仕切りなおす真冬ちゃん

「ほ、本題なんですか？」もじょかつたりで良こんですけど、真冬
と一緒に狩りこきません？」

「えー？あ、ああ、俺で良かつたらこつでも呪こよ」

「ありがとう、れこまかー！」

とこつわかで、真冬がやことモノ、をすましにこなつた。会議は？

鍵 side

「こつ…」

わつを深夏に受けた攻撃で刈り取られた意識が戻つてくる
てか、真も真だよ…なにもそんなこと言わなくとも…
まあ、確かに俺も悪いんだけどさ…それを言つのはやめてほし…
とりあえず体を起こして自分の定位位置に座る
そしてわつをの事を言おうと真の方を見ると

「よつしゃ部位破壊！真冬ちゃん！援護よろしく！」

「はー！その間に真先輩は回復してきておこてくだれー！」

「了解ー！」

真冬ちゃんと一緒にモン、をやつていた

…え？真つて真冬ちゃんと昨日会つたばかりだよな？

それなのにいつも名前で呼ばれてる…なんか悔しいな

「お 鍵起きたのか」

「あ ああ にしても俺が気絶している間に何があつたんだ?」

「まあ…真のいつもの奴だよ」

納得した あいつのフレンドリーさは異常だからな

この前なんかゲーセンで対戦した初対面の相手と氣づいたらメアドとか交換してたし

そんで同類である真冬ちゃんとゲームの世界に狩りに出かけたってことか

でも そろそろ会長がご立腹だから会議を仕切り直そつか

side out

とこりでさ と鍵が深夏と真冬ちゃんに話しかけてくる
ちゅうビクヒストが終わって一息ついていたところだったので真冬ちゃんが応答する

「深夏と真冬ちゃんは『初めての』のはあんなに楽しかったのに『』みたいなことつてある?」

「なんだよやぶからぼつこ」

「いや さっき会長が言つてたんだよ『世の中がつまらなくなつたんじやなくて自分がつまらなくなつたんだ』って」

「改めて考えても久々にいい言葉だよな 会長の受け売り いつたいどこの本に書いてあつたんですか?」

「久々とは失礼な!だ 大体 本で見つけた言葉なわけないじゃない!」

会長 こいつに向いて目を見て言いなさい

「真冬はお化粧…」「スメですかね」

「「化粧?」」「今日はよく鍵と言葉が被るなあ
「はい 子供のころはお母さんがお化粧しているの見てて羨ましい
と思つて 中学のころに初めて買った時はすぐ嬉しかったんで
す でもいまだと最低限のメイクしかしなくなつて…」

「ああ なるほどね でも大丈夫! 真冬ちゃんは化粧しなくても
かわいいから! というより真冬ちゃんの美貌を隠してしまつ化粧
なんてないほうがいい!」

「あ ありがと!」わざわざ…」

また口説いてるよ…てか ほんとにこりねーな鍵は
まあ 確かに化粧が無いほうがその人の本当の姿つて感じで嫌いじ
やないけど

「おい鍵! また真冬を口説いてんじゃねーよ!」

「や やだなあ深夏嫉妬するんじゃないよ お前も魅力的だからさ
「いやいや 嫉妬じやねーから…」

「深夏にも結婚したら真冬ちゃんが妹になるという魅力が

「しかもあたし本人の魅力じゃねえ!」

やばい 今日の鍵絶好調だ どうせ「ヤキモチ焼いててかわいいな
あ」とでも思つてるんだろ

「ヤキモチなんて焼いてねーから!」

「おお! ついに以心伝心まで! ポールインは近いぞ!」

駄目だ! いつ 最早手の施しよつがない

「怖いよ… そう思に込めるお前が怖いよ…」

「思い込み？ 仕方ない そういうことにしてあげ すいません調子乗りましたその拳を下ろしてください真様」

流石にこれ以上はまざいと思つたので拳を振りかぶつて鍵に近づいたら鍵が土下座してきた

土下座するなら最初からすんなつての…

「この光景を見ると 鍵の方が成績良いなんて思えねーよな」「キー君は優良枠で入つてきたのよね… ニュー君のほうがふさわしいと思うんだけど」

「いやいや 僕なんかが優良枠なんてそんな「終盤2回のテストわざと間違えたくせに」…」

知弦先輩が笑いながら小声で言つてくる

なんでこの人知つてるんだ？ 僕が鍵を生徒会に入れるために”わざと”テストの点数下げたこと
やつぱりこの人だけは敵に回しちゃ 駄目だ

「大体この学校の生徒会役員の選抜基準おかしいのよ！人気投票や優良枠もそうだけどメンタル面もきちんと評価に加えるべきだわ…」「俺はこのシステムいいと思いますけどね」

この碧陽学園の生徒会役員の選抜方法は他の学校とは一味違う他の学校のように選挙などは行われず 純然たる人気投票によつて役員が決まる
しかしそれでは流石にまざい といふことでの妥協案が先ほど話に出てきた『優良枠』だ
これは学年の成績優秀者が希望すれば生徒会に入れるといつもの今期はその制度を使って鍵が生徒会入りした

「よくよく考えたら なんで真がここにいるんだ？」

「そういえば そうだよな 僕が折角入学当初かなり低かつた成績をトップまで上げたのに…」

「知らねえよ 一昨日こっちに戻つてきたら急に「お前 今日から生徒会役員な」って言われたんだよ」

しかも会長補佐つて言つこまいち分からぬ役職でな

「そういえば 何で真先輩はすぐに生徒会に来なかつたんですか？ 今学期始まつて結構たつてたのに」

「あー 僕実は3月の中旬くらいからアメリカにホームステイしてたから」

そのためか時差ぼけなんだよなあ… ようやく眠気がとれた所だよ

「びっくりしたよ 帰つてきたら鍵が生徒会に入つてるんだもんな まあ予想は出来てたけどな」

「すういですね その点に関しては真冬 杉崎先輩が大きく見えます」

「「真冬 それは錯覚だ 鍵に尊敬するなんて末期だぞ」「頭がいいのは事実だぞ 深夏に真 まあ真には劣るけど」「動機が不純なんだよ！ お前が入るなら真のほうがマシだ！」

まあ俺はその逆で鍵を生徒会に入れようと思つたんだけどな

「成績が良いだけつて言つ理由で入れるのはおかしいよ… そのせいで杉崎みたいな問題児が入つてきて」

「生徒会のメンバーを全員メロメロにしたのは悪いと思つてますが…」

「誰一人なつてないわよ…」

「ええ！？」

「なにその新鮮な驚き！ 自信過剰も甚だしいわね」

「そんな… まだ会長しか落ちてなかつたなんて…」

「私も落ちてないわよ！ 杉崎なんかより豹堂の方が良いわよ…」

突然俺に話の矛先が向けられる

鍵がこっちを睨んでいる いや 僕にはそういう気持ちないから

「でも俺が一番恐怖するのは会長が最初に言ったことなんですね」

「え？ どういうこと？」

「つまらない自分になる つまり今のこの状態を楽しんでいるけど最終的にはそれが当たり前のようだ感じてしまつと思つて…」

「たしかにそれはあるよな」

「あー それは分かるかも 家が経営者だから生活基準を高くしたらなかなか下がられないよね」

「なるほど それで会長は美少年をはぐらせるのが趣味になつたと」

「前々から俺にネットを使って調べさせてたのもそのためだつたんですね？」

「ないわよ！ そんな趣味！ あと豹堂！ あんたが言つとしゃれにならないからやめなさい！」

「さらには札束で人の顔をペチペチ叩くのがやめられないと…」

「こまではこの碧陽学園に『桜野くじむ 被害者の会』が設立されたとかされてないとか…」

「どんな貴族よ私！ そこまでのスケールじゃないから…」

「貧乏な今では家に侵入してくるアリの足を一本一本もぐのが唯一の生き甲斐と」

「他にもミニマズや昆虫を虫眼鏡で焼くのもよくやつているか」

「ただの根暗じゃないのそんの…」

口論では会長は体力が低いから口論では鍵や俺には勝てない

やつぱり会長弄りは楽しいな

「真冬も… そろはなりたくないですね でもどうすればそつなるん
でしょうか?」

「どうなんだろ? 世の中で勝ち組って言われている人たちは何
か自分の中でやりたいことを見つけてそこそこの人生を送っている
んだろうな」

「そこそこ幸せ… ねえ 駄田だな」

「ん? どうした?」

鍵がつぶやいたことに俺が反応する

それにつられて会長や知弦先輩達も鍵を見つめる

「俺は ハーレムエンドを指す!」

そう鍵が高らかに宣言する

俺はそんな鍵をじつと見つめる

俺以外のメンバーは鍵の言葉に呆れています

「妥協はしても 高い位置で妥協してやる! 美少女をはぐらせて
『美少女にはもう飽きたな』って言えるまで上つてから妥協してや
る!」

「まあ 目標を持つのはいいことだよな」

「ああ そのスタンスは悪くないよな」

「そうですね 何も考えず上に上るのはいいことですよね」

知弦先輩は言葉を出さず 鍵に対して微笑んでいる
生徒会のメンバーが次々に鍵の発言に賛同する

ただ一人 会長だけが

「えー 疲れるのはいやだよお…」

と発言する

この人は ほんとに駄目人間だな 他のメンバーも呆れている

「じゃ 今日の会議はここでしゅりよ~」

ここで会長が飽きたのか 会議を終了させる
そしてすぐさま鍵にアイコントラクトを送る
さあ 僕たちの仕事の始まりだ

駄弁る生徒会？（後書き）

どひ（「ゆ

真「長いわ！ どんだけ伸ばしてんんだよ！」

いや「区切りがいい部分まで書いてたらこんなに長くなっちゃった

真「なんだよそれ…」

まあ次話は駄弁る生徒会の終盤だから

真「あんまし関係なくね？」

さいですか

今回の投稿で今年最後…とこうよつもう今日で今年も終わりですね

皆さん

作&あみ・真「よいお年を…」

来年も早めに投稿したいと思いますので来年もよろしくお願いします
それでは～

駄弁る生徒会？（前書き）

皆さん！

あけまして！

オメデトウござります！

今年もノロノロですが 更新頑張つて生きたいと思ひます！

それでは駄弁る生徒会？ 始めてこきます

駄弁る生徒会？

知弦 side

「…で 杉崎と豹堂はまた生徒会室に残つてるんだ」

アカちゃんが生徒会室を眺めながらやうつぶやく
あ 今はニユー君じやなくて私 紅葉知弦が語り部をやめてひらつかわ
その言葉に対し深夏が首を鳴らしながら応答する

「だから対応に困るんだよな あたし達と話すために生徒会の雑務
を全部引き受けたんだもんな 真が手伝っているのもいまいち理
解できないけど」

「ま 真冬は杉崎先輩のこと嫌いじゃないですよ？」

真冬ちゃんがゲーム画面から田を離して深夏の言葉に反応する

「この学校であいつのこと嫌いなやつなんていないわよ 杉崎はハ
ーレム言わなきゃ彼女くらこできるし 豹堂は何もしなくても彼女
できるわよ」

「あれ？ アカちゃんもしかしてキー君とニユー君のこと…」

「そ そんなことないわよ…」

アカちゃんが顔を真っ赤にしながら反論する

ニユー君の話をした途端に真冬ちゃんが反応したのもちょっと気にな
る

それよりもアカちゃんよ…

ああ…アカちゃんのあの顔いいわあ…

「まあ あいつはなんだかんだ言ひ合ひのうちに大黒柱なのがもね
「でも念長さん 杉崎先輩と付き合つてあげないんですね」
「それとこれとは別よ あいつは甲斐性なしの上に浮氣性のやつと
…」

まあ そこもキー船のいこといふと言ふるわね
つて…あら…真冬ちゃんがずっと画面を見つめている

「真冬ちゃん? セツキからずっと何を見つめているの?」
「え? ! い いえ なんでもないですよー?」
「これつて…真のパートナーカード?」
「うううとお姉ちゃん!」

深夏が真冬ちゃんのゲーム画面を覗き見る…まさか
そう思い 田を細めつつ真冬ちゃんに聞いただす

「真冬ちゃん もしかして…ニコ一君のことが好きになつたの?」
「! ? / / / そ そんなわけないじゃない?」

見るからに動搖している真冬ちゃん これは…将来的にまずいわね
まあ ニコ一君は譲らないけどね

そう考えながら私達は学園から離れていった…

side out

カリカリカリ… ペッタン
俺と鍵が書類に田を通し必要事項を記載 承認印を押す
そんな音がさきほどから生徒会室に響いている

「なあ 真」

「うん？ どうした鍵」

今の今まで作業に集中していた鍵が俺に話しかける

「別にお前も残つて作業を手伝つことないんだぜ？ 実家の手伝いもあるんだろう？」

なんだそんなことか…

「いいさ 僕が好き勝手やつてるだけだし それに…」

書類を机において笑みを浮かべながら口を開く

「前にも言つただろ？ 一人で抱えるな 今のお前は一人じゃないつてな」

一瞬鍵がポカンとした表情をする

しかしすぐに顔を綻ばせ こちらに笑いかけてくる

「ああ そうだつたな！ 僕がミスしたらお前がフォローしてくれるもんな！」

「え？ そこに関しては限度があるぜ？」

「な？！ おいおい それは酷くないか？」

お互に笑いあいながら 冗談を言いながら作業を再び開始する

こんな日常が俺は大好きだ こんな生活をこれからも続けていきたい

碧陽学園生徒会 ここはつまらない人間達が毎日笑いあう幸せな空間である

駄弁る生徒会？（後書き）

今年初の投稿です！

真「今回短いな…なんでだ？」

実は投稿の前にチューハイ3缶あけちゃ（グチャヤー）

真「この駄作者が…まじめにやれ！」

まじですいませんでした

真「とりあえず今回で『駄弁る』は終了か…」

だね 次回からは『放送する』をしていこうかな

真「ああ あのカオス回か

まあそういうな 絶対楽しいから

次回も早めに投稿しますのでよろしくです
それでは

放送する生徒会？（前書き）

意外と速く書きあがりましたので投稿します

それと実は読者様に相談がござります
もしよろしかつたら活動報告のほうを見ていただいたらなと思います
申し訳ございませんがよろしくお願ひいたします

それでは「放送する生徒会」始めていきたいと思います

放送する生徒会？

「他人との触れ合いやぶつかり合いが あつてこそ人は成長していくよ！」

会長がいつものように小さい胸を張つて言葉を発する
しかし今はそんなことにからついている暇はない！

「ちょっと真先輩！ やっぱりグ カスは卑怯ですよ…」

「そつちのス フリもだろ！ フルバーストは避けきれないんだよ…」

「ちょっと…そここのゲー オタ二人！ きちんと話を聞きなさい！」

今日は趣向を変えて真冬ちゃんとガ ダムの格ゲーをしていた
俺の選んでたのはグフ スタム 1000コスでは最強ともいえる
スペックを持つ機体だ

真冬ちゃんはストラ クフリーダム 3000コス故の高火力の機体
会長に言われたので渋々終了して会議に集中する

「それで？ 今日の言葉はどういう意味ですか？」

「あ ゲームしても話は聞いてたのね」

まあ一部は聞き逃してましたけどね

俺の言葉を聞いて会長がホワイトボードに文字を書き始める
書き終わつてホワイトボードを バンッ！ つと叩く

「これよ…」

「えーっと…ラジオ放送？」

え？ どうこいつとこまいち理解できないんだけど

見ると鍵や椎名姉妹 さらには知弦先輩さえポカんとした表情をしている

そんな中真冬ちゃんが一番最初に口を開く

「ら ラジオって… 音楽をかけたり喋ったりする あのラジオですか？」

「そう そのラジオよ」

「会長 なんていきなりラジオなんですか？そういうのは生徒会ではなく放送部の仕事でしょ？」

俺が至極当然の事を会長に對して発する
他のメンバーも俺の言葉に対しつなずく

「何を言つてるの！ 生徒会って言つのは生徒をまとめる立場にあるのよ？政見放送みたいなもたまにはやらないといけないわ！」
「政見放送なんてよく知つてましたね 意外です」

俺と同じ考えだったのか知弦先輩が会長の頭を撫でて満足そうな顔をしていた
撫でられて会長は顔を緩ませるが何かに気づいて知弦先輩の手から抜け出す

「子供扱いしないで！政見放送くらいしつてるわ！」
「そうだつたわね ごめんなさいアカちゃん」
「分かればいいのよ 分かれば」

頬を膨らませながら怒る会長 なんだか頬いっぱいに種を詰め込んだハムスターを思い出した
何か視線を感じたのでそちらを見ると知弦先輩がアイコンタクトを送ってきた…なるほど

「ところで知弦先輩 昨日のあのクイズ番組見ました？ 面白かつたですよね」

「そうね 流石は高視聴率といつべきかしら……そういえばその番組で政見放送の問題が出てた気が……」

「……とにかく政見放送よー」

滝のように汗を流しながら続けようとする

昨日のクイズ番組に影響されたなこりや

まあこの状態の会長は止められな

鍵もやれやれという感じであきらめている感じだ

深夏も嘆息混じりで話し出す

「まあ四の五の言つてもどうせやるんだろ？ でもなんでラジオなんだ？ 映像のほうが簡単じゃねーのか？」

「当初はその予定だつたんだけど 放送部に言つたら『今渡せるのはこれくらいしか…』って言われたからラジオなの」

そつ言いつつ会長が珍しくてきぱきと準備をしていく
しかし配線関係は放送部にやらせていたようでマイクスタンドを俺たちの前に設置していく

なるほど ここにくる前に同じクラスの放送部員の女子に「頑張つて」と言われた理由が分かつたよ…

本当にお疲れ様です放送部員 今度放送部に顔を出しに行いつかなかつたたく関係ないけどその事を言いにきた女子が顔を赤らめていたのは何でだろ？

「か 完璧に準備されちゃつてます…」

真冬ちゃんがゲームをしていた時とは正反対にテンションがガタ落

ちしてた

まあ 目立つのがそこまで好きじゃない子だからなあ……よし

「大丈夫だよ 真冬ちゃん」

「ふえ？ な 何が大丈夫なんですか？ 真先輩」

「そんなに緊張しなくともみんな素人だし もしうまくいかなくて
も俺や皆がフォローするから」

「あ ありがとうございます！」

顔を少し俯けながら返事をする真冬ちゃん これで少しは緊張がほ
ぐれると良いな

ふと視線を感じたのでその方向見る… 知弦先輩が鋭い目つきでこちらを見ていた… 俺なんかした！？

「ほら最近は声優さんのラジオが増えてるでしょ？ 私達のような
美少女達がラジオをすればリスナーも喜ぶはずよ…」

「いや それは声優さんだからこそじゃ…」

「それに声優さんやリスナーの皆さんを舐めすぎでしょ…」

俺と鍵が正論でつつゝむ… といつより鍵 お前今日初めて喋つたぞ
しかし会長はこのまま企画を押し通すようだ

「可愛い声でキャピキャピ話していればその辺の男性リスナーなん
て口口リよ」

「謝れ！ 俺と真以外の男性に謝れ」

「「「「いや お前（キー君）（杉崎先輩）（鍵）と俺（二ユ一君）
(真先輩)（真）を一緒にするな（しないの）（しないでください）
(するなよ)」」」」

「まさかの一斉射撃！？ 酷い… 真はこの前リ バスのラジオ聞いて
楽しんでたじやないか！」

いや あれは声優さんのネタを楽しむラジオだろ 鍵と違つてまじめに聞いてたぜ？俺は

「杉崎は騙されるのね…まあ6人もいればネタは死ぬよつなことは無いだろうし大丈夫 いつもどおりに話せば」「いつも通り…ねえ」

「杉崎は喋らないでね 杉崎の発言すべてが放送コードに引っかかるから」「ひでえ！」

「あ 豹堂は積極的に喋つてね？ あんたの言動がこのラジオを左右するといつても過言ではないわ」

「？ 別に俺が喋ろうが喋るまいがラジオには関係ない気がするんですけど…」

（（（あ そういえば本人は自分の人気を知らないんだつた）））

真冬ちゃん以外のメンバーがあきれたように俺の顔を見る なぜ？ まあ鍵が規制されるのは仕方が無いな いつも発言があれだし… 正直俺も付いていけない時あるし

そんなことを考えていると会長が俺の近くに来て耳元に話しかけてきた

…え それをやれと？ うわ 顔がまじだ はあ…怒られても知らないつと

「ん？ 真 急にパソコンを開いてどうした？」

「いや これから全国の放送局を電波ジャックしてこの放送を全国に流そうかと」

「「「「何しようとしてんの（るんだ）（るの）（るんです）！？」

「」

「お前どうしたんだ！？正氣を取り戻せ！」

「」

「い　いや　会長がそうじゅうひ…」

俺がそういつた瞬間全員が会長を睨む…まあ本氣ではなかつたんだ
ろうな　多分

「な　なに？　皆　私が放送するラジオなんだから世界に知らしめる
必要が」

「　　「　ないです（ないわ）（ねーな）」」

「うわあああああああああああああああん」

あ　ガチ泣きだこれ

そんなこんなで会長を知弦先輩が泣き止ませてラジオを始めようと
する

ちなみにこれは生ではなく録音らしい　それならまだトラブルがあ
つても編集が出来るんで何とかなるだろつ

じやあ何で電波ジャックしようとしたんだよ　生放送じゃないので

まあみんな落ち着いてラジオの準備を始めていた

真冬ちゃんは諦め半分　興味半分でマイクを突いている　なんか癒
されるな

知弦先輩は　あの人「コホン」とかいつて喉の調子確認してると
やることはすべて手を抜かない人だからな

深夏はいつも通りだな　クラスでも代表として色々と喋つてしたり
するからな　慣れたものなんだろつ

鍵は…喋れないからつて若干不貞腐れてる　まあ…元気出せよ

俺？　PCで録音データとかのチェックをしたりしているよ　まあ
なんだかんだで面白そудし

そうして皆が準備が終わったのを確認した会長が口を開く

「さあ！始めるわよ！」

そう言い会長が手元に何種類もあつたボタンの一つを押してラジオ放送が始まった

放送する生徒会？（後書き）

今回は本格的にラジオが始まる直前までです

真「なんで会長は俺にハッキングなんて…」

そらお前がハツカーマがいのことが出来るからだろ

真「え！？」

お前のプロフィールのPCにじりはそこまで行っていた という事だよ

真「いやいや 僕そんなことしないから…」

ならなんで断らなかつた？

真「お前がそう書いたからだろ！」

まあ落ち着け… って何小さく前ならえしてるので？

ねえ！ ちょっと待つて！ 僕にも慈悲を！

真「うるせえ！ 今日こそ俺の堪忍袋の緒が切れた！くらえ！」

え！？ ちょっとまつて「無子…！」 ぐあああああああ
ドガアアアアアアアアアアアン…！…！

真「ハア…ハア…ハア… 今日はここまで また次話でお会い
しましょう それでは

放送する生徒会？（前書き）

まさかの連続投稿

これが新年年明けの力だといつのか…

活動報告にコメントを下さった方々ありがとうございます
そのことを参考に「怪談する生徒会」は書かないことにいたしました
「怪談する生徒会」を期待していた方には申し訳ないと私は思っています

てなわけで「放送する生徒会？」始めて行こうと思っています

今回では真面目で冷静な（はず？）真が軽くボケ要員になつていま
す（笑）

それと今回は台詞の前に名前が書いてありますが『真』と書くと真
と真冬の区別が付かないのでものは『豹』と表記することをお先にお
話しておきます

放送する生徒会？

会「桜野くりむの…オールナイト全時空…」

杉「放送範囲でけえ！」

豹「とうとう時空をも超えたよ…」お子様会長…」

生徒会の一存OP「Treasure」

会「さあ始まりました桜野くりむのオールナイト全時空！」

知「夜じゃないけどね」

豹「放課後の夕方ですよね 今」

会「この放送は富士見書房の一社提供でお送りいたします
深「どうしたんだ富士見書房…無駄な投資も甚だしいな おい」
会「まあギャラは円の上に機材はこっちのものを使っているから
スponサーしてもらつことは何も無いんだけどね」

真「ならなんでスponサーを読み上げたんですか？」

会「雰囲気よ 雰囲気 うん今のところひとつでもラジオっぽいわ

真「はあ…なら良いんですけど…」

会「いら真冬ちゃん！ そんな低いテンションじゃダメよ… リス
ナーはもつと女子の明るい会話を望んでるんだから…」

真「そうでしょうか…」

会「うん 男子リスナーなんてそんなもんよ」

杉「いらっしゃり なんでリスナーを見下げた発言するの…？ 生徒
に喧嘩売ってるんですか！？」

会「パーソナリティあつてのリスナーでしょ？」

杉「リスナーあつてのパーソナリティでしょ！」

深「おお… 鍵がまともな事言つてる… ラジオ効果すげえ！」

豹「…でもよく考えてみるとリスナーはパーソナリティがない放
送では存在できない さらにパーソナリティもリスナーがいなけれ

ば放送では存在できない つまりリスナーとパーソナリティは表裏
一体というわけで…」

真「そして真先輩が本編で使わなかつた頭をフルに使ってます！
真先輩帰つてきてください！」

会「そうよね…私が間違つていたわ杉崎…」

杉「分かれば良いですよ…分かれば…」

会「やっぱり ある程度は媚びておかないといけないわよね うん
私どつても大人ね」

杉「だからそういう発言が駄目だつて 」

会「お便りのコーナー」

杉「無視！？ ラジオなのに 言葉のキヤツチボールは無視！？」

知「それがアカちゃんクオリティ」

豹「会長にまともな返答を期待しちゃ駄目だろ」

杉「なんで知弦さんと真は所々でしか喋らないの！？あんたらが一
番舵取りしないといけない人たちでしょ！？」

知・豹「……」

杉「ラジオでの無言はやめましょうよ…」

会「さて一通目のおたよりは 」

杉「進行重視か！会話の流れは無視ですか！」

会「『生徒会の皆さんこんばっぱー！』はい『こんばっぱー！』

杉「え何その恥ずかしい挨拶！恒例なの！？」

杉崎以外『こんばっぱー！』

杉「俺以外の共通認識！？ 唯一俺と同類の真まで…」

豹「え？この挨拶は当たり前だろ？」

会「『桜野ぐりむのオールナイト全時空いつも楽しく聴かせていた
だいております』ありがとうございます」

杉「嘘だ！ これは第一回放送のはずだ」

豹「時系列なんてこの放送には些細なことだぜ？鍵

杉「流石は『全時空』！」

会「あ あと言い忘れてたけどこれ一応生でも放送されているわよ

まあ今聴いてる人は少ないだろ? だから足下のお昼にも放送するけ

۲۰

杉「どうりでメールが来るはずだ！」
一齋発言に氣をつけてくださいよ！

会「はいはい じゃメールの続きね」といひで歸れんに質問なんで

すが歯をかぶせたまま歯科をされたら嬉しいのでしょうか？僕は好きな
游戏代は歯科のうが歯をかぶせたまま歯科をされたら嬉しいのでしょうか？僕は好きな

人かいでどんな告白を
イスをお願いします』

杉「『くつねえ』って呼ばれてるんだー。」なんに口つのくせー。」

会「そうねえ…」これは難しい問題ね
つせねば でも恋愛経験豊富な私から言

杉「男と手を繋いだ」とも無いくせに…「

余「ね あるよー。男と手を繋いだ」といひこー。」

杉一誰だ！俺のハーレムメンバーに手え出したのは！　出て来い！

豹「あ それ俺だ 去年くらいに迷子になつてた会長の手を引いて

家まで送つた記憶が…

会「そ もんないかで思ひ出れなくとも思ひ出ねよ！ わたなせりの腰りぐの回輪だね」
「に腰掛ければいいと黙り

会「知弦はどう思つ?」

会「真冬のやんばり」。

真「え？ そ そうですね… 真冬は… あの… 分かりません」

会「深夏は？」

深「当たつて碎けろ！以上！」

「もうひとつの心を丁重に扱おう!」

会「うんうん 最後に豹堂！」

豹「すいません 僕はそういう経験したことが無いんでノーノーメントで」

杉「唯一の良心がああああああああああ！」

会「杉崎つついさい…さて 次のお便りは『妹は預かった 返してほしいば指定した銀行の口座に…』ってあれ？ これ間違いメールね ちょっとスタッフ一ちゃんと確認してよねーまったく」

杉「スルーなの！？ そんな重要そうなメールスルーしちゃつていの！？」

真「それとスタッフなんてこの放送にはいない気がするんですが…」

会「『生徒会の皆さんこんばつぱー』『こんばつぱー！』

杉崎以外『こんばつぱー！』

杉「だからなんで皆ノるの！？ 真もさうと乗つかつてるし…」
会「『くりねえ どうじょう 私お金が早急に必要で…』といふのも 妹が誘拐されてしまつて…両親も金策を練つているんだけどなかなか集まらなくて…どうしたらいいでしょうか』」

杉「ティープなお悩みきたああああああああああああああ…つてかこのメールの前に110番しきよ！それにこれぞつこのメールに関係して るだろ絶対！」

会「うつんじうじよ…よしーラジオネーム『被害者の家族』さんには富士見書房と豹堂のポケットマネーから『まとまったお金』をお送りしまーす」

杉「用意しちゃうんだ！ しかもスponサーから勝手に…さらには 真からも…つて真？ 急にPCが壊れるくらいにタイピングをし始めてどうした？」

豹「ん？ いやなに まとまったお金を準備するために政府のトップの口座の金を俺のに書き換えようかと」

杉「やめろ！ そんな犯罪レベルな事をしようとするんじゃない！」

豹「人質の命には変えられないだろうが！」

杉「急に正論を述べるんじゃない！」

妹はもう帰つてこない

放送する生徒会？（後書き）

今回は「」で終了です

真「…チツ生きていたか」

ちよつと…なにその物騒な言い方！

真「てか終わりがこれかよ…」

まあいい区切り方が思いつかなかつたから

真「…」

? どうした?

真「…いや なんでもない」

そつか? ならいいんだけど

さて「放送する生徒会」はもう2話ほど続きますなるべく速く書き上げたいと思いますので今後もよろしくお願ひいたします
それでは

放送する生徒会？（前書き）

遅くなつてすいません！

休みも終盤の上にバイトで忙しくてなかなか書けませんでした
そしてこの話・オリ主が挟みにくい！
そのためクオリティは今回かなり低いです

それと後書きにアンケート？みたいな事を書いてますのでぜひ

てなわけで放送する生徒会？ 始めています

あと1万PV突破しました！

皆さん本当にありがとうございます！

放送する生徒会？

会「さて聴いていただいたのは現在発売中の『妹はもう帰つてこない』でした 1stシングルの『弟は白骨化していた』も合わせてよろしくね~」

杉「あんたの過去にいつたい何があつたんだ！」

真「妹である真冬には耐え難い曲でした…」

豹「……妹…か」

会「？あれ？どうしたの豹堂 暗い顔しちゃつて」

豹「え！？あなんでもないですよ 続けちゃつてください」

会「そう？じゃあここで恒例のコーナー『椎名姉妹の姉妹で

ユリコリ』」

杉「…………それはちょっと聴いてみたいかも…」

豹「鍵後でしばぐぞ てかなにやらせようとしてんですか！？」

真「杉崎先輩！？そこはちゃんとツツコンでくださいよ！ 少しは真先輩を見習つてください！」

深「そうだ！聞いてないぞ そんなの！」

会「このコーナーはリスナーから送られた恥ずかしい百合っぽい脚

本を椎名姉妹が演じるというこの放送屈指の人気コーナーよ

杉「人気な設定なんだ…俺が言える立場じゃないけどこの生徒大丈夫か？」

豹「鍵安心しろ お前共々すでに手遅れだ」

杉「ひでえ！」

会「個人的には好きじゃないんだけどね ほら『機嫌取りよ ご機嫌取り これやつておけば生徒も満足するだろし

杉「だからそういう発言は本番中にしないでください！」

会「じゃ 椎名姉妹よろしくね~ はい これ台本」

真「ううう…本当にやるんですか？真先輩…」

豹「ごごめん やつから会長が『止めるなよ？』って視線送つ

てきてるから…」

深へるなんた」れ……」んな読んでらね」よ……

!

杉「副会長の資格全く関係ないでしょ……これ」

「……………」

真「真冬も…覚悟を決めました

杉「何キツカケ！？」 ねえ！ 何キツカケ！？」

豹「深夏に真冬ちゃん…大きくなつて…」

杉「なんでお前はお前で泣いてるの！？ お前一人の父親か！？」

会 そ れ し て い て あ る

耽美なBGM

『真冬……あたし もハ!』

『真冬……可愛いよ
真冬……』

『ねねえ……ひや……んん!』

杉「待て待て待て待て待て待て！
個人的にはドキドキワクワクだけど

これは校内放送でやつていいレベルじゃないでしょ！？」

深「ひでえ！ そういう反応されるとあたし達本格的にいたたまれ

ねーじゃねーか！」

豹

知「あら?」
——ユー君が顔を真っ赤にして思考停止しているわね

それよりも 椎名姉妹の絡みは放送コードに引っかかるわね そういうティープなのはプライベートだけで留めてもらえないかしら? 深「勘違いされるような事言つなよ・プライベートは『なんなんじやねー!』

真「そうです! リスナーの皆さんは信じないでくださいね!」
知「: そうね ここではそういうことにしておくべきだったわね 軽率な発言してごめんなさいね 一人とも

椎名姉妹『もうやめてええええええ!』

会「さ まあ次のコーナー『杉崎鍵の『殴るなら俺を殴れ!』』
杉「なんですかそのコーナー!」

会「このコーナーは校内でもし誰かを殴り飛ばそくなぐらいカッとしてしまつたらとりあえず杉崎を標的に発散しよう というコーナーです」

杉「俺の人権は!?」

会「生徒のいざこざを解決するのも生徒会の仕事 というわけで今日も揉め事がありましたら2年B組の杉崎まで』連絡を」

杉「するなああああああああああああ」

会「仕方ないわねえ… 希望者もいないようだし今日はこのコーナー飛ばすわ」

杉「なんで俺の担当だけそんなコーナーなんですか…」

会「それじゃ今度は『豹堂真の『紳士にお悩み相談』』のコーナー」

杉「何この俺との差! おんなじ男なのに!」

会「このコーナーはリスナーさんから送られた相談事に豹堂が紳士に答えるコーナーよ」

杉「: というより ものすごい普通なコーナーですね」

会「うん 杉崎と違つて豹堂は眞面目だからね」

杉「そういう理由なんだ! 俺と眞の扱いの差!」

豹「／＼＼＼＼ハツ! あ あれ? 俺何してたつけ?」

会「お 豹堂起きた? これから豹堂のコーナーだから はいこれお便り」

豹「えあはい分かりましたえーと…2年B組の放送部員さんからのお便り…つてうちのクラスからも参加してるんだよ…」

杉「なんでうちのクラスからも参加してるんだよ…」

深「というかわかりやすい名前だなあい」

豹「まあとりあえず読むな『生徒会の皆を元気なばつぱー』はいこんばつぱー」

杉「なんか異様にお前なれてないか?」

豹「気にしない気にしない『実は私は同じクラスに好きな人がいるんですけどその人は鈍感でさらに私は口下手で彼とうまくしゃべることが出来ませんどうすればいいでしょうか?』…鈍感なやつねえ…一体誰だろうなその彼って」

杉（鈍感なやつが好き…その彼って絶対真だよな?）

深（ああ絶対真のことが好きだなこのリスナー…でもこいつの鈍感はしょうがないからなあ…）

豹「ん?二人ともどうした?」

杉&深『いやなんでもないぞ?』

会「それよりも豹堂!リスナーさんの質問に答えない」と…

豹「あそうでしたねうーんとりあえずわその彼ときちんと話してみようそして面と向かって喋れる様になつたら告白しちゃおうその恋を俺は応援するよ!」

杉&深（自分自身のことなのに応援しちゃつたよ!）

会「うんうんやっぱり豹堂がコーナーすると安心ねーこの調子で次のコーナー!」

杉「え!?あれだけでいいんですか?!」

会「次は私と豹堂のコーナー!『桜野ぐりむと豹堂真へのファンレター』!」

杉「明らかに差別してね!?コーナーの格差が激しいですよね!?

豹「俺これに関しては全く聞いてないんですけど…てか俺なんかにファンレターなんて来ないでしょ」

会「憧れの部長さんからのお便り『豹堂真様…前におたしに対し親身な態度で助言をくれたあなた 今ではあたしのかけがえの無い存在となつております お話ししたいことがござりますので後日 陸上部の部室までおこしください』」

杉「お前何？！陸上部の誰かになんか助言語つてたの！？」
真「真先輩！ ちょっと詳しく教えてください！」

豹「詳しく述べて言われても…あ そういえば前に陸上部の部長からマネージャーにならないかって誘われてたな…その事かな？」

『 桜野くりむ様 貴女の可愛らしさを見るたび僕の心はドキドキと
会「それじゃ、次の便りいくよ~」匿名希望さんからのお便り

アガルト

杉「またラブレターか！ てか放送を利用して俺の女にちょつかいかけたやつは！ いい度胸だ出て来い！ 俺が相手して げふつ」

「だつて、俺の彼女にラブレターなんにを口走ってるのよあんたば！」

るから……」

会「私は杉崎の彼女じゃないから！」ラジオでそんなへんな事言わないの！」

杉「すいません カツツとなつてやりました 反省はしていません
念「なんでもんはふてぶてーの!?

杉「反省してます」

会「あんたはどこのスノボ選手よー。」

杉「うう…でもこの会長への手紙のコーナーは俺が嫉妬に狂つてしまつんで耐えられません」

会「」...」

深「どうでも良いけどイチャついてないで早く進めよ」「いいイチャついてなんかないわよ！」深夏までへんた

いで！豹堂はなに温かい目で見てるのよ…」

豹「いえ～ なんでもないですよ～」

会「もう… 一人のせいで調子が狂ったわ 次のコーナーいくわよ
真「あ なんだかんだ言って杉崎先輩の要望どおり手紙読むのやめてくれるんですね」

会「うう… とにかく次！ 『学園 五・七・五』」

豹「なんかさつきの俺のコーナー並みの定番コーナーが来ましたね
会「うん ネタ切れだから」

杉「言っちゃうんだ！ そんな大事なこと放送内で言っちゃうんだ！」

会「このコーナーはリスナーの考えてくれたこの学園にまつわる面白おかしいことを五・七・五にして紹介するコーナーです」

豹「普通すぎてなんだか怖いな」

杉「だよな 逆に危機感を抱くほどありきたりなコーナーだよな
これ」

会「こほん それでは参りましょう 匿名希望さんの五・七・五」

『燃えちまえ メラメラ燃えろ 杉崎家』

会「……す 素晴らしい詩ですね 情景が目に浮かぶようですね」

杉「……」

会「えつと… 杉崎？ 私が言つのもなんだけ… 突つ込まないの
？」

杉「いえ… すいません リアルで身の危険を感じてテンションが
上がらないです」

会「あ…」

深「まあ… 笑いのレベルを超えてたよな これは」

真「真冬も若干引いてしまいました」

知「まあ でもそうよね キー君つてそういう立場よね 基本 皆の
憧れの美少女の集まる『ユニーク』に在籍しているだけならまだし
も自分で『攻略する』『ハーレム』だの言つてているから… 自業自

得
？

豹「知弦先輩の意見には一理あるかな？」
つていう警告「じゃないのか？これ」
まあ『限度を考えろよ？』

「うう…ええい！構うもんか！」は俺のハーレムだ！文
句ああやつ出て来ー！ 一人ひとり話聞く煊赫も買うザ！ ど

から「おどり」

卷之三

杉一火
た
つけるのだけは勘弁してください まじですいませんでし

会「…杉崎がラジオなのに泣きながら土下座したところで次の機会…」これも匿名希望さんから「

『金が無い 勢いあまつて 人さらい』

「え？ なにが？」

杉「いやさつきの誘拐事件の…そんなことより二つの年前と住所！書いてないんですか！？」

とは書いてあるわ」「

意地悪なかつたんだよ！」

をもつた

会「そんなの誰もが最初から気づいてた事じゃないの
ラジオを続けましょう」まあ私達は

「では、最後の五・七・五です」
「収録中…てか放送中に決着つきそうですね」
「誘拐事件」

『眞面目にさ 仕事をしろよ 生徒会』

会「まつたく失礼しちゃうわよね」

……いや、俺が言ひのもあれですか、すくそ、お気持を分かります」

「真冬も分かります」

「…失せぬ二つめの矢を射たまひゆうがんをかげておるが、

「約」今其上に「二月」の字がある。

会「不愉快だわ！」このコーナー終了！上

木「そ、い、う、態、度、が、駄、目、な、ん、だ、と、思、い、ま、う、!」

豹「今までが十分フリーダムでしたけどね」

深
ん
?
会長さん メールが来てるみたいだぜ」

「ええ、ごすみ

杉「今の活打ちおもいつきり聞こえますよ知弦さん」

「なんのことかしら？」

「書き換えたのをまた直すのよ。」

「でも随分とあつさり解決したわね
どんな犯人だつたのかしら

?

真「ええと よくは分からないんですけど た妹が自分で犯人を叩きのめしたそうです 最終的には攫われてい 犯人は… 重症だそうです」

い
い
い
ん
!

真一「妹さんも基本は遊んで貰つていただけらしいです でも偶然このラジオを聞いて自分が攫われたことに気づいて犯人をボコボコしたそうです…」

杉「俺たちのせいなのか！」

深一 結局この犯人はなんで二万円がほしかったんだ？

犯人は意識を失う前に『この子の姉に…貸したままの…一万円を返して…ほしかった…だけなのに…ガクッ』と倒れたそうです

真「そのリストナーさんからのメールの最後は『悪は滅びるのよ…あつはつはつは…』で締めくくっています

杉「このラジオのリストナーはろくでもねえな！」

豹「このリストナーが異常なだけじゃないか?」

「…まあ一件落着どう?」とて…」
「…俺この放送終わつたら犯人とこ見舞いに行くわ 助かつてく

わよ……」

豹一 鍵先に行つておいでくれ 僕メロンとか買つてくるから
会「ええと…色々ありましたか」のラジオも そろそろお別れ
の時間となりました「

杉「やつとか…短い番組の割に驚くほど『ティープ』だった…」

会「最後は『今日の知弦占い』でお別れです それでは皆さんまた来週」

知「それでは今日の知弦占いを 当校の獅子座のあなた 近日中に『世にも奇妙な物語』っぽい事態に巻き込まれるでしょう タリを見かけたら全力で逃げましょう

ラツキーカラーは《殺意の色》 どす黒いか真紅か その辺は各自
のイメージにお任せするわ

メタルギアならば それも可能になるでしょう
最後に一言アドバイス

死なないで

以上
知弦占いでした

杉「怖いですよ！」 獅子座の人間今日が終わるまでビクビクですよ

「？眞理屋？」「うう、アサヒ？頭ぬき屋一ヨクスガ

「さや！ な なんですか！？」ハツ！ も もしかして告白で

豹「真冬ちゃん、確かに今ピース オーカーとオスもつてたよね！」

深「…… そういうば 真つて 獅子座だつたな……」

放送する生徒会？（後書き）

真「ちょっと聞いてみたいんだけど
ん？ どうした？」

真「俺の声って誰かイメージして決めてるのか？」
え？ ……あ 決めてなかつた

真「決めとけよ…」

てなわけで読者の皆さんは真の声を脳内再生で誰にしていますか？
個人的には『蒼穹のファフナー HEAVEN AND EARTH
H』の西尾暉役の梶裕貴さんかなと思つてます

「全然違うだろ！」や「この人のほうが…」などのご意見あります
たらご感想のほどお願ひいたします

放送する生徒会は次回で終わりですがちょっと遅くなるかもしれません

ではまた次回に それでは～

放送する生徒会？（前書き）

遅くなつて申し訳ありません… その上今回も短いです…
学校始まつたりして忙しいです…

3・4回”とくらには頑張つて投稿したいと思いますので…

さて 今回で放送する生徒会ラストです

今回は杉崎が全部喋つております

あ アドバイスや感想もよろしければお願ひします… 感想があると
やつぱりテンション上がるんで（笑）

それでは放送する生徒会？ 始めていきます

そして近づきつつある完全オリジナル…

放送する生徒会？

杉崎 side

「今日の放送は大好評だったね～！」

例の番組の放送があつた後の放課後
会長は大満足な顔で生徒会室でふんぞり返つていた 知弦さんも楽
しそうにニヤニヤしている

しかし…俺や椎名姉妹はすっかりゲンナリしていた
あ そうそう真はどうしたのかつて言ひつと…

「ま 真先輩…大丈夫ですか？ 颜色がものすごく悪いですが…」
「…うん？…あー大丈夫…ただの…寝不足だから…」
「寝不足だけじゃない気が…無理はしないでくださいね？」
「うん…ありがと…優しいね 真冬ちゃん…」
「い いえ 後輩として当然です//」

とまあ こんな感じでグロッキー状態になつていた

なんでも昨日あの占いを聞いた後今日学校に来るまでずっとピーチ
ウォーカーとオースを最高難易度でノーキルノーアラートプレイを
していたらしい

そのせいで夜も寝ていないので教室に入つてきた時顔色がかなり悪かつた

まあ 確かに昨日の占いはかなり怖かつたがな…

余談だが真はさつきのように朝からたくさん生徒に心配されてい
る…7割方女子に…羨ましい…

それはそうと会長に聞こえないように小声で深夏と真と会話する

「（なあ…深夏 真… あれ好評だつたように見えたか？）」

「（いや 少なくとも「うちのクラスではドン引きだつたよな）」

「（あの放送中何回も周りから俺たちに暖かい視線が来てたよな…

巡や守とかからも…）」

「（ああ…皆途中で箸を止めたつきり食欲なくして 結局昼飯が食えてなかつたな）」

「（会長さんはなにをもつて大好評だと思つてんだ？）」

「（会長や知弦先輩の…クラスメートの先輩に…聞いたら ビッグやら一人に気を…遣つて愛想笑いしていた…らしいぞ？）」

「（ああ なるほどな… てか ほんとにお前の交友は広いな）」

俺と深夏が真の言葉で納得したところで会長が一いち方に視線を向けてきた 俺たちはぎくりと体を強張らせる

「三人のクラスではどうだつた？ 皆大絶賛だつたでしょ…」
「う…」

そんな純粹な目で見られると…」いつ 事実を言い辛い…さすがの深夏もそつと視線を逸らしていた

俺はぎこちなく笑いながら会長に言つ

「え ええ…大人気でしたよ」
「そうでしょう…」

いかん ここでつけ上がらせるのもまた問題だ
真も「なんかフォローしろ」と田配せしてくる

「ええ… そうですね 言つなれば職業ランキングにおける『会計事務』と同じくらい大人気でしたよ…」

「それ人気なの！？」

会長は首をかしげていた… よし なんとか誤魔化したぞ 深夏が「グッジョブ！」と俺を褒め称える

真は2000の特技を持つ男みたいにサムズアップをしていたしかし会長の矛先はすぐさま真冬ちゃんに向いてしまった

「真冬ちゃんのクラスでも 人気だつたよね…」

「え」

真冬ちゃんが蛇に睨まれた蛙のようになる ああ 彼女のクラスもうちと一緒か…

真冬ちゃんが困っているのを見かねたのか真が小さなメモに何か書き込んで会長に見えないように真冬ちゃんに渡すなるほど… 真のことだ 真冬ちゃんを助けるために何か打開策を

「ははいそうですね… 言つなれば モハンにおけるギギ ブラ
くらい大人気でしたよ…」

「それは本当に人気といえるの…? といつより私知らないんだけど…」

チョイスが微妙だ！ 何でギギ ブラチョイスした！

まあ… 真の助言を受けた真冬ちゃんもうまいこと(?)かわしていった… というより 今日は真使い物にならないな

会長はすっかり気が緩んでいるのか「そつかそつかあ」と実に満足げだ… まずい なんだかいやな予感が

「じゃあ 第一回もやらないとね…」

『…………』

会長以外全員… 今回は知弦さんも含め嘆息する

知弦さんはある程度ノッていたけど それでも 一回 二回とシリーズ化するとなると話は別らしい
とりあえずグロッキー状態の真も含めて全員でアイコンタクト会議開始

(どうしますか？ 会長まだあれやるつもりですよ？)

(アカちゃんにしては執着が強いわね… 一回やれば満足するとふんでいたのだけれど 下手にクラスメイトが気を遣つたことが裏田に出たわね)

(どうすんだよ… あたし もうあんなの勘弁だぜ？)

(俺も… いやだし 放送部にこれ以上… 迷惑かけるのもまずいだろ…)

(真冬も… もう無理です…)

全員でうーんと考え込む 会長は一人で上機嫌に次の企画を練つていた

うちのブレーンの真に何か対策を… 駄目だ 今日は使い物にならなかつたんだつた

… しようがないので自分で妥協案を考えて会長に提示してみた

「会長」

「ん？ なあに杉崎」

「その… ですね こいつのは たまーにやるからこそ 有り難味が出るんじやないのかなあと」

「？ つまりどういふこと？」

「つ つまりはですね？ 一回田をするとしたらある程度置いてからのはうが良いじやないのかな…と」

「……」

俺の提案に会長が考え込む… その間に俺は視線を皆に向ける

皆俺に向けて親指を立てている…おい真 手がなんか震えてるぞ
無理すんな

そう 会長はすぐ別の流行に乗ってしまう人だ ある程度の期間抑
えておけばこのよつたな企画忘れてしまつ…そう考えたわけだ
会長は数秒間たつぱりと考へ込んで…笑顔で答えてきた

「そつね！ ここのラジオはクオリティ重視だもんね」
「え ええ」

クオリティ…高かつたか？あれ

「分かったわ杉崎 次は…うん 一ヶ月は置いて放送しましょー」
「そ そうですね！」

全員ほつとして胸をなでおろす…よかつた…
こうして危険すぎるラジオの第一回放送は少なくとも一ヶ月はやら
ない事が決定した
これで当分は大丈夫だらう…そつだ 今日は真と真冬ひやんとモ
ハンでもして気分を

「じゃあ次は生徒会のPRビデオの撮影に入りましょー… ようや
く撮影用の機材が揃つたのよ！」

ドンッ つと机の上に大きなビデオカメラが置かれる…

『え？』

全員が信じられないものを見た もしくは聞いたよつに固まる
真に至つてはさつき以上に顔色が悪くなつて…
会長だけ…会長が女神のような綺麗な笑顔を向けていた…だがこの

笑顔は
：

「さあ……」これから本番よー。」

- 1 -

今の俺たちには悪魔の微笑みのようだつた

放送する生徒会？（後書き）

真「……」

お　おーい真　大丈夫かー？

真「……か」

ん？なんだ？何かあつたか？

真「核ハ　ド」「？」

…トラウマになつちやつてる…#あ次回には直つてるかな？…直つ
てほしい

それでは次話でお会いしまじょつ
それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7443z/>

生徒会の切札

2012年1月10日23時50分発行